

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00039

研究課題名（和文）西洋近代観念説の自然主義的基本論理の形成とその崩壊過程の解明

研究課題名（英文）The Formation and Collapse of the Naturalistic Basic Logic of the Early Modern Western Theory of Ideas

研究代表者

富田 恭彦 (Tomida, Yasuhiko)

京都大学・人間・環境学研究所・名誉教授

研究者番号：30155569

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、西洋近代の代表的哲学者たちがその思想の基盤とした「西洋近代観念説」の基本的な枠組みが、古代ギリシャの原子論の近代における復活と運動するなど、多重的な仕方で自然科学的基盤を持つものとして形成されたこと、そしてその意味でそれが「自然主義」的であったことが確認されるとともに、それがどのような仕方で当初の論理を歪め、変質していったかが明らかとなった。とりわけ重要な成果となったのは、『純粋理性批判』におけるカントの枠組みがどのような仕方で論理的に歪んでいたかを明らかにしたことである。その成果の一部は、国際誌において現在オープンアクセスの形で公開されており、今後の反応が大いに期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋近代哲学のもともとの枠組み（「観念説」と呼ばれる）は、自然科学の考え方と表裏をなすものであった。ところが、次第に科学と「第一哲学」としての哲学とが乖離し、科学的思考の基盤を失った不健全な哲学が横行することになった。本研究は、もともとの観念説（ないし表象説）の枠組みがどのような意味で科学的思考を基盤としていたかを明らかにするとともに、パークリやヒュームやカントにおいてその論理がどのようにして歪められていったかを明確にしようとするものである。これによって、学的な営みの健全性の回復に資するとともに、カントのように自らが認める原理や概念を固定化しようとする反動的な試みに警鐘を鳴らすものである。

研究成果の概要（英文）：In this research, I clarify that the original framework of the modern Western "theory of Ideas," on which representative philosophers of the (early) modern Western world--e.g., Descartes, Locke, Berkeley, Hume, and Kant--based their thoughts, was intrinsically linked with the revived atomism. For this reason, it was originally "naturalistic." Furthermore, I make clear how Berkeley, Hume, and Kant distorted its original naturalistic logic. One of the most important results of this research is that it showed how Kant distorted the original framework in his various arguments in the Critique of Pure Reason. Some of the results have already been published in an international journal as open access monographs, and future reactions are highly anticipated.

研究分野：西洋精神史

キーワード：西洋近代哲学 観念説 自然主義 デカルト ロック パークリ ヒューム カント

## 1. 研究開始当初の背景

(1) デカルトに始まり、その後少なくともカントに至るまで、西洋哲学の基本的枠組みとなってきた西洋近代観念説 (theory of ideas もしくは theory of representations) の考え方は、もともと復活した原子論的発想を基盤とするものであった。にもかかわらず、特にバークリ以降、その自然科学的基盤が見失われたまま、自然科学と乖離した「哲学」なるものの、さまざまな誤解に基づく言説が繰り返されてきた。本研究の背景の一つは、哲学のそうした不健全な状態についての認識である。

(2) 前世紀から今世紀にかけて、分析哲学や現象学の系譜に属する諸研究の進展により、科学に基づいて科学を考察するという「自然主義」的営みがより肯定的に捉えられるようになり、それとともに、「知識は絶対的基盤に基づかなければならない」という信念の虚偽性に、改めて目が向けられるようになった。このことは、自然科学的基盤を持つ西洋近代観念説の枠組みを見直すための、重要な視点を与えることになる。それは、デカルトやロックが与えた西洋近代観念説の原型的枠組みが、当時の自然科学と結びついていたことに対して、それを不純物の混入と見るのではなく、そこに自然科学をメタレベルで考察するメタ自然学 (meta-physics) のむしろ健全な論理を見て取るようになるからである。前世紀から今世紀にかけて現代哲学の中でこうした視点が着実に準備されてきたことが、本研究のもう一つの重要な背景をなしている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、ルネ・デカルト、ジョン・ロック、ジョージ・バークリ、デイヴィッド・ヒューム、イマヌエル・カントをはじめとする多くの西洋近代の代表的哲学者がその思想の基盤とした「西洋近代観念説」を取り上げ、その基本的枠組みが、古代ギリシャの原子論の近代における復活と連動するなど、多重的な仕方でも自然科学的基盤を持つものとして形成され、その意味で「自然主義」的であったこと、そして、それが、いくつかの異なる仕方でもその自然主義的基本論理を歪め、変質していったことを明らかにすることにある。

この目的を達するため、西洋哲学史はもとより、科学史、科学哲学、言語哲学の最新の知見を駆使して、既成の西洋哲学史という限られた視点からだけでなく、本来の意味での西洋精神史の視点から、その形成・変質過程が持つ論理を捉えるよう努める。

## 3. 研究の方法

【2018年度】まずデカルトに戻って、デカルトが公刊を断念した『世界論』の論理が、それに代えて出版された一連の第一哲学に関する書物の議論の中でどのような役割を果たしていたか、すなわち、彼の自然科学の知見が、それを支えるべく構築された第一哲学 (形而上学) において、(彼の意に反して) どのようにその中に組み込まれていたかを検討する。ここで重要なのは、デカルトの公式的見解と、予想される彼の隠れ自然主義的な見解との関係がどのようなものになっていたかである。

【2019年度】次に、ロックの観念説を取り上げる。彼の観念説が、自然科学的基盤を持つことは、彼自身がさまざまな形で示唆している。そのロックの自然主義的論理がどのようなものであったかを再度検討し直すことが、ここで試みられる。

【2020年度】第三になすべきことは、バークリの「観念論」(物質否定論)の見直しである。バークリは、ロック的な自然主義的観念説の「物そのもの」、「観念」、「心」からなる三項関係の枠組みの中から、「物そのもの」は知られないとしてそれを消去する。このバークリの『原理』等に見られる観念論の論理が、どのようにしてデカルトやロックの原型的観念説の論理を歪めて成立したかを、バークリの後期の思想をも射程に入れながら再検討する。

【2021年度】第四に、そうした一連の動きを承けて、ヒュームがどのような仕方でも原型的観念論を崩壊させていったかを、彼の「心像論」と「懐疑論」とを念頭に置きつつ、考察する。この考察によって、原型的観念説がもともと持っていた新科学との結びつきをヒュームがどのように希薄化していったかが、明らかになるはずである。

【2022年度】最後に、最も重要な課題となるのは、カントの超越論的観念論の論理をどう見るかである。この件については、すでに『カント哲学の奇妙な歪み』等でその基本的視点を示しているが、ここではさらに立ち入って、カントが若い頃から関わっていた自然科学の研究が、どのような仕方でも、科学の基礎学たるべき形而上学を準備するための『純粹理性批判』の議論に入り込んでいるかを考察する。心像論者ではないカントが心像論的経験論者であるヒュームの言説からショックを受けて「独断のまどろみ」から目覚めたというカントの説明は、現代の研究水準からすれば実に奇妙な説明に見える。また、彼は、経験は必然性を教えないとして、私たちの基本的な考え方がある仕方でもともと私たちの知的機能の中に組み込まれているとしながら、その組み込まれ方を説明するのに「胚芽」や「素質」といった当時の発生学の

用語を用いる。こうしたカントの議論の再検討によって、デカルトからカントに至る西洋近代観念説の基本論理の変容の実際を、具体的に確認することになるであろう。

#### 4. 研究成果

(1) 2018年度においては、まず、デカルトが公刊を断念した『世界論』の論理が彼の第一哲学の議論の中でどのような役割を果たしているかを検討した。その結果、例えば『省察』における彼の形而上学の中で、『世界論』で展開された彼の見解がその重要な構成要素としてたびたび用いられていることを具体的に確認するとともに、そもそも「観念」という、デカルトがその近代的用法を確立したテクニカルターム自体が、彼の自然学的論理空間の中で機能するものであったことを確認した。この確認作業においては、デカルトの自然学的見解を十二分に押さえるため、『哲学の原理』第二部以降の論述についても詳細な検討を加えた。

こうして、2018年度の研究は、当初の計画に従って順調に遂行され、所期の目的を達成することになったが、当該年度においてはさらに、その研究と並行しかつそれを補完するものとして、いくつかの関連する研究を進めた。その一つは、カントの『純粹理性批判』に見られる自然学的見解の優位という隠れた特質に関する研究であり、これについては日本カント協会からの要請に応じて招待講演を行い、しかるべく議論を進めた。もう一つは、ニーチェ研究である。ニーチェは、カントに批判的ながら、カント的視点をある仕方で継承している。そして、ニーチェの場合には、特に、生物学的視点を基礎に置く自然学優位の考え方が顕著に認められる。当該年度においては、これらの点についても研究を進めるとともに、オックスフォード大学からの依頼により、ロックに関するある著作の批評も行った（この件については、*The Journal of Theological Studies*, 70 (2019), pp. 465-466を参照されたい）。

(2) 2019年度は、ジョン・ロックの『人間知性論』に見られる観念説がどのような意味において自然主義的であったか、すなわち、それがどのような意味において、科学的思考に依拠しながら科学についてメタ自然学的視点から論じるものであったかを、明らかにするよう努めた。

認識論的第一哲学（形而上学）が科学を基礎づけるという観点を強力に示したデカルトやカントやフッサールらの影響下に、久しく自然主義的認識論は否定的に見られ、また、物そのもの・観念・心という三項関係の枠組みを持つ当初の観念説は科学の仮説的思考の結果であったにもかかわらず、仮説の論理への理解が次第に遠のき哲学と科学が乖離するに及んで、当の観念説の枠組みそのものが、物そのものへのアクセスを不可能にすると誤解されてきた。

こうした誤解を解くべく、研究者自身がこれまで遂行してきたさまざまな試みに加えて、2019年度は再度ロックの観念説がどのような仕方で仮説的思考を自覚的に踏まえた営みであったか、そして、なぜそれが単なる循環ではないのかを考察した。

この考察には、ロック的な自然主義的観念説に歪んだ理解を与える機縁となった、デカルトとカントの認識論的見解について、それをどう読み直すかが鍵となる。この件についても、すでに別途詳細に論じたことのあるデカルトとカントの観念説・表象説の「隠れ自然主義」的論理構造の解明をさらに進め、彼らの認識論的見解がどのような仕方で彼らが支持した自然科学的思考に依拠していたかを再度検討した。

以上の研究成果の一部は、富田恭彦『バークリの『原理』を読む 「物質否定論」の論理と批判』（勁草書房、2019年）および富田恭彦『詩としての哲学 ニーチェ・ハイデッガー・ローティ』（講談社、2020年）においてこれを公にし、その成果をさらに海外で発表すべくその準備を進めた。

(3) 2020年度の第一の課題は、バークリの「観念論」（物質否定論）の見直しであった。バークリは、ロック的な自然主義的観念説の、物そのもの・観念・心からなる三項関係の枠組みの中から、「観念」の視点からしたとき物そのものは知られないとして、物そのものを消去する。バークリの『原理』等に見られるこの観念論の論理が、どのようにしてデカルトやロックの原型的観念説の論理を歪めて成立したかを、バークリの後期の思想をも射程に入れながら再検討することが、主として当該年度前半で試みられた。

デカルトが近代的な意味における「観念」を、形而上学の重要概念として導入したとき、その「観念」の論理自体が、形而上学が基礎づけるべき自らの「自然学」的営みの中で形成されていたことは、明らかである。この論理は、自然学的理由から心の外に新たな物体を措定することに基づき、それとの関係において、私たちが日常外にある物の性質とみなしている直接知覚されているものをすべて心の中のなにか、すなわち「観念」として、位置づけ直すことによる。つまり、「観念」は、先に新たな外なる物体（ないしロック的に言えば「物そのもの」）が措定されることと連動して導入された概念であって、それには物そのものの措定が先行している。デカルトによって形成され、ロックによって受け継がれたこうした観念説の基本的枠組みを正しく理解していれば、バークリのように、観念が直接の対象となる限り物の存在は確認できないとする説も、今日まで続く、それに追隨する西洋近代観念説解釈も、本来ありえなかつたはずである。2020年度前半の研究は、主としてこの点を再確認するものであった。

2020年度は、さらに、これまでの研究成果を公にしてそれに対する批判的応答を求めるため、英文による中間報告文献の作成に注力した。

(4) 2021年度の第一の課題は、ヒュームの観念説がどのような仕方でもデカルトやロックの原型的観念説の論理を歪めたかを明らかにすることであった。もともと西洋近代の観念説は、復活した原子論(粒子仮説)の論理を基盤として成立したもので、実在する「物そのもの」が仮説的に想定され、それとの対比において心の中に「観念」があるとされ、例えば、従来、物の性質とされてきた色や味などは、物そのものによって感官が刺激されることによって心の中に引き起こされる「内的なもの」として、観念に数えられることとなった。これに対して、すでにパークリは、心の直接の対象が観念であること等々の理由で、外にあるとされる物質ないし物そのものを否定し、「物質否定論」を唱えていたが、ヒュームは物そのものや物質の実在を否定するわけではないものの、それらに対して懐疑的な態度をとり、のちのカントの「物自体」を不可知とする考え方の先駆けとなる、懐疑論的な考え方を提示した。2021年度は、これを確認することに注力した。

また、この研究と並行して、カントがどのような意味で、ヒュームの『論考』や『研究』に見られる経験論的な基本的視座を誤解し、その誤解を自らの超越論的観念論の立場の基盤の一つとしたか、また、カントの純粹知性概念(カテゴリー)の選択が、どのような意味で、自身の自然科学的見解に基づいていたかについても、改めてこれを確認する作業を進めた。パークリやヒュームにおいて、観念説が当初持っていた自然科学との不可避のつながりが希薄化したのとは対照的に、カントにおいては、デカルトやロックとは別の仕方でも、自身の自然科学の考え方が『純粹理性批判』の枠組みを支えていたことが、これによって明らかとなった。つまり、カントは、のちのフッサールやクワインが言う「自然主義」の立場を表面的には拒否しながら、実際にはその立場で議論を進めていたことが、明らかとなった。

(5) 2022年度は、本研究の最も重要な課題である「カントの超越論的観念論の論理をどう見るか」について、研究を進めた。この件については、すでに『カント哲学の奇妙な歪み』(岩波書店、2017年)や『カント批判』(勁草書房、2018年)等でその基本的視点を提示しているが、ここではさらに立ち入って、カントが若い頃から関わっていた自然科学の研究が、どのような仕方でも、科学の基礎学たるべき形而上学を準備するための『純粹理性批判』の議論に入り込んでいくかを考察した。心像論者ではないカントが心像論的経験論者であるヒュームの言説からショックを受けて「独断のまどろみ」から目覚めたというカントの説明は、現代の研究水準からすれば実に奇妙な説明に見える。また、彼は、経験は必然性を教えないとして、私たちの基本的な考え方がある仕方でもともと私たちの知的機能の中に組み込まれているとしながら、その組み込まれ方を説明するのに「胚芽」や「素質」といった当時の発生学の用語を用いる。こうしたカントの議論の再検討によって、デカルトからカントに至る西洋近代観念説の基本論理の変容の実際を、具体的に確認した。そのさらなる成果については、国際誌での公表に向けての準備が、今なされつつある。

(6) 5年間の本研究を通して、デカルト、ロック、パークリ、ヒューム、カントをはじめとする多くの西洋近代の代表的哲学者がその思想の基盤とした「西洋近代観念説」の基本的枠組みが、古代ギリシャの原子論の近代における復活と連動するなど多重的な仕方でも自然科学的基盤を持つものとして形成され、その意味で「自然主義」的であったこと、そして、それが、いくつかの異なる仕方でもその自然主義的基本論理を歪めて変質していったことにつき、その推移の基本的な方向性が明らかになった。その成果は、いくつかの著書、論文、招待講演として公表することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Tomida Yasuhiko	4. 巻 50
2. 論文標題 Kant's Categories of Quantity and Quality, Reconsidered: From the Point of View of the History of Logic and Natural Science	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Philosophia	6. 最初と最後の頁 2707 ~ 2731
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11406-022-00563-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田恭彦	4. 巻 16
2. 論文標題 詩としての哲学 ローティ、カント、ハイデガー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Heidegger Forum	6. 最初と最後の頁 1 ~ 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yasuhiko Tomida	4. 巻 50
2. 論文標題 Locke and Berkeley on Abstract Ideas: From the Point of View of the Theory of Reference	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Philosophia	6. 最初と最後の頁 2161 ~ 2182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11406-022-00506-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 富田恭彦	4. 巻 20
2. 論文標題 拙著『カント哲学の奇妙な歪み』補遺 胚芽生得説 は初期の目的を達成したか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本カント研究	6. 最初と最後の頁 67 ~ 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Tomida Yasuhiko	4. 巻 70
2. 論文標題 John Locke: The Philosopher as Christian Virtuoso. By Victor Nuovo	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The Journal of Theological Studies	6. 最初と最後の頁 465 ~ 466
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/jts/fly150	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 富田恭彦
2. 発表標題 詩としての哲学 ローティ、カント、ハイデガー
3. 学会等名 Heidegger Forum (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富田恭彦
2. 発表標題 拙著『カント哲学の奇妙な歪み』補遺 胚芽生得説 は所期の目的を達成したか (近著『カント批判』の論点から)
3. 学会等名 日本カント協会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 富田恭彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 220
3. 書名 詩としての哲学 ニーチェ・ハイデッガー・ローティ	

1. 著者名 富田恭彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 バークリの『原理』を読む 「物質否定論」の論理と批判	

1. 著者名 富田恭彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 326
3. 書名 デカルト入門講義	

1. 著者名 富田恭彦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 カント批判 『純粹理性批判』の論理を問う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------